



本誌には書評のコーナーがある。編集委員の一員として書評を書かせていただくことがあり、この機会に本誌における書評の位置づけについて考えてみたい。

2010年の秋ごろの編集委員会では本誌の改革について議題に取り上げられており、判型のA4判化なども話し合われていたように思う。そのような時期に本誌の編集委員会で書評を始めることについて、(当時の)委員長の武田雅俊先生と事務局長の細田眞司先生から新たな企画として提案された。英国の精神医学会の学会誌である『Br J Psychiatry』のBook Reviewに倣うものであった。その後、実際に書評がスタートしたのは第113巻(2011年)第1号からであり、武田先生による『精神科診療データブック』、仙波純一先生による『精神疾患と認知機能』の紹介があった。

なお、書評の開始に遡ること約3年前の第110巻(2008年)第4号より、「精神神経学雑誌百年」の企画がスタートした。初回の記事には『精神神経学雑誌』が1902年の創刊である一方で、『Br J Psychiatry』が1855年、『Am J Psychiatry』が1844年からの刊行であることが述べられており、数世代をつないできた学会誌として、著者も国際的な視野をもつ必要性を感じてきた。

そして時が進み、情報伝達的手段も飛躍的に発展し、大量のデジタル情報が瞬時に飛び交う時代を迎えている。著者は編集委員会の一員として月日が経つなかで、紙媒体からオンラインジャーナル化という流れを見聞してきたが、改めて昨今はIT化の進展が加速度的に速まっているように感じる。

今日では旧来の紙媒体の学術雑誌を電子化した「電子ジャーナル」がWEB上で公開されている。インターネット環境さえあれば図書館に行かずとも、論文や文献、調査資料などを閲覧することが可能となり、国内外の論文などをオンラインで読むことが可能となった。無料で閲覧できるオープンアクセスの電子ジャーナルの引用数は、紙媒体

やオープンアクセスではない学術雑誌の引用数よりも多くなる傾向があり、論文の引用数が増えることで、雑誌のインパクトファクターも上がっていく状況が生まれているとも言われている。

そのようななかで、本誌の書評の位置づけはどのようなものであろうか。学会の機関誌である以上、専門領域(精神医学や心理学など)に関連して出版された多くの書籍が書評の対象になっている。精神医学の発展という側面を考えると、原著論文や症例報告などとともに、書籍もその一翼を担ってきたと思う。ペーパーレス化の時代において、そして特に学術論文が業績として評価される状況において、あえて出版物として世に出る書籍はむしろその価値が高まっているのかもしれない。実際、著者が書評を担当させていただいた書籍は多くの方々に読むことを勧めたいと感じるものであった。論文とは違い、書籍はオープンアクセスではないという特徴がある。書評においては、主観的な読後感という一面はあるが、それらを客観的な視点に置き換えて書籍を紹介することの必要性は小さくはないと思われる。

「芸術は長く人生は短し(Ars longa, vita brevis)」という言葉はヒポクラテスが「医術を学ぶには長い月日を必要とするが、人生は短いので怠らず励むべきだ」と述べたことからきているが、ここでの芸術は医術にとどまらず、音楽や絵画、そして書籍や論文にも広くあてはまると思う。われわれ一人一人の生命は短く有限ではあるが、優れた作品は作者の死後も後世に残り、優れた作品との出会いは人生を豊かにする。そのような意味でも本誌の書評が、よい芸術(書籍)が世代を超えて共有されることにつながり、会員の皆様が日々の臨床や活動のなかでこころの課題に取り組むうえでの一助になることを願っている。

谷井久志